

或は、延慶本の「是を御覧して、我いつる事をは神明の御とかめのあるにや春の日とは春日の明神とくめさせ給へとにや」と摂政が思いめぐらす、その程度の書きこみを要するのである。

以上のように、屋代本、覚一本は逸話のやまは描いているものの、細かな仕上げを省いている。このことをどのように解釈して行ったら良いか。

今回は、いちおう問題の指摘にとどめて、その解釈は、又、稿を改めたい。

〔論文受理 五一・九・二〇〕

当道系本の「攝政殿落留給事」から屋代本のそれを示す。

攝政殿モ供奉セサセ給タリケルカ東寺門ノ程ニテビンツラユヒ
タル童子ノ御車ノ前ヲツト馳過ケルカ御車ノ内ヲ見入レタルヲ
御覽スレハ左ノ肩ニ春日ト云文字ソ見サセ給ケル是ハ法相擁護
ノ春日權現淡海公ノ御末ヲ守ラセ給カト目出タカリシ事共ナリ
攝政殿ハ大明神ノ御告成ト被思食ケレハ御共ニ候深藤左衛門信
澄ヲ召テ何トカ被仰タリケン御牛飼ニキツト目ヲ見合セタレハ
御車ヲ遣返シ奉リ大宮ヲ上リニ北山邊知足院殿へ入セ給フ是ヲ
ハ人不奉知

摂政が春日明神の御告で都にとどまったという内容であるが、覚一本等も主旨で変わらない。注目されることは非当道系本で主役の座にあった進藤左衛門がここでは端役にすぎず、落留まる意志が御告を受けた摂政から発せられることである。

八坂本では全体が簡略化され、進藤左衛門も登場さえしないが、それも含めて当道系本は摂政を軸にして描いていることが指摘される。それに比べる時、非当道系本は「侍」進藤左衛門の物語と言えるのではないか。益田氏は平家物語の成長という縦の線で「侍」の物語に注目されたのであるが、やや異質ながら、当道系と非当道系という横の線で「侍」の物語に興味を持つのである。縦の線と言えば「攝政殿落留給事」は現在では原初の「平家物語」になく、後に増補されたものと考えられている。

(註二) 益田勝実「『平家物語』の一段階」(『文学』一九七四・一二)

五

最後に、当道系本の内容について、問題点をあげておく。

前述のように、当道系本では摂政の落留まりは御告を受けた摂政から発せられるのであるが、その御告に問題がある。

「春日權現験記絵」の詞書では「うしろより黄衣の神人まねきたてまつると御覽して、御車をとどむれば、神人みえず。又御車をすすむればさきのごとく、かくする事二三度になりにければ」と春日明神の御告は「まねく」という行為等によって、明らかな意味を持っている。ところが、屋代本の「ビンツラユヒタル童子ノ御車ノ前ヲツト馳過ケルカ御車ノ内ヲ見入レタル」では、どうせよということなのか、具体的意味が全然わからない(この点、覚一本も同じ)。屋代本がすぐ後に「是ハ法相擁護ノ春日權現淡海公ノ御末ヲ守ラセ給カト目出タカリシ事共ナリ」という語り手の言葉を置いているのは、この弱点を補うための、欠かせない説明というべきであろう。屋代本が登場人物の言動によらないで、語り手の説明ですませることは八坂流の一傾向と言えるかもしれないが、物語としては未熟という外ない。

覚一本は、屋代本的なものに「件の童子の聲とおぼしくて、いかにせん藤のすゑ葉のかれゆくをたゞ春の日にまかせてやみん」が付加えられている。しかし「春の日にまかせ」ることが具体的にないので、御告の内容ははっきりしないままである。この歌は源平盛衰記、南都本のように春日明神が手を下してこそ生きるのである。

白ではない。しかし、編集されているにせよ、その折の資料として一つのまとまった説話がとりあげられたと考えることはできるのである。他のいずれの本にも見られない内容であるが、或はそれも他の本の「攝政殿落留給事」から派生したものかもしれないが、いずこか「侍」に共感する人々のところで伝えられ、完成していたものである。

(註二) 島津忠夫「祇王説話と平家物語」(『国語と国文学』昭51・4)

四

益田勝実氏が岩波ホール夏期講座『平家物語』で「篠原合戦」について次の指摘をされた。

『平家物語』には、武士の頭梁としての平家や源氏のことが主として語られています。また一方で、〈侍の物語〉ともいふべき箇所々々があります。侍たちが源平動乱の中をどう生き抜こうとしたか。それを知りたい人びとがあつて、そういう人びとのために描かれているように思われるのが、それらの箇所です。

次いで「篠原合戦」を読んで行かれ、作者に思いを馳せられる。そこで、わたしは、このような物語をする作者とは、いったいどういう人であろうか、と考えるみずにはおれません。別に、それが何の何兵衛であろうか、などということではありませんが、かりに、『平家物語』が、これまでよく言われて来たように、はじめは平清盛を中心の、次には源義仲、その次には源義

「攝政殿落留給事」をめぐって

経を中心の、武士の頭梁たちの物語であるとする、これほどまでに侍たちの運命をことまかに物語ろうとする作者は、その基軸の部分の語り手とは、少し違う性格の人かも知れない、ということであります。事実、『平家物語』の諸本の本文を見ていきますと、はじめから、これほど詳細でみごとに構成された、「侍」の物語があつたのではないようです。

更に、初期形態本を比較して、次の結論を示される。

なぜ、こう比べて読めばわかることを、ことさら言つてまいいたかと言いますと、従来、初期の『平家物語』の本文が、長門本や『源平盛衰記』に成長してまいります過程で、抒情的な物語の部分や故事来歴をこまごまと述べる部分が付け加えられていった、ということの指摘が有力でありまして、武士の頭梁たちの盛衰の物語としての『平家物語』の中に、きょう扱いましたような、「侍」の物語を持ち込んで来ようとした段階があり、それは考えてみると、相当に重要なことではなかったのか、ということと言つてみたのであります。

益田氏の話を引用したのは、「攝政殿落留給事」に見られることをそれに関係づけることはできないかと考えたからである。

ことわっておきたいことは、益田氏の述べられた「侍」は「地主層」「領主層」「豪族的領主層」と分けられ、武士の頭梁に対しては、進藤左衛門は摂政の「侍」であることである。この点、益田氏の意図から外れていることは承知している。

である。

さて、進藤は「平家ハ悪行年積テ神明神道ノ罰ヲ蒙テ一門親類洛中ニ跡ヲ留メス何クヲ指トモナク落失候ヌル上ハ行末トモ何程ノ事力候ヘキ」云々と説得する。彼の言葉は作者の見方のごとくである。この言葉が摂政にどう思われたか、そういうことを記す必要もない不思議によって、実は落留まりは決定するのである。

それは春日明神の使である二人の天童の出現である。ところで、天童が摂政に尋ねられて、春日明神の使であることをあかすところに「イカニセン」の歌を詠じたことが記されている。このあたり、南都本もやはりこの材料を消化しきっていないと感じられる。なぜなら「イカニセン 藤ノ末葉ノカレ行ヲ」の部分が状況とのつながりを失なうて間のびしているからである。「イカニセン」の歌は摂政が立出し、春日明神が示現するその時でこそ生きるものと思うが、ともかく、このことは南都本の「攝政殿落留給事」もモチーフを異にする二つの逸話を編集したのではないかとの感を否めない。

さらに南都本では摂政が「都ニテハ猶悪カルヘシトテ高則ヲ知ヘニテ吉野ノ奥ヘソ籠ラセ給ヒケル」とされる点が注目される。延慶本、長門本、源平盛衰記は次のとおりである。

是を知らずして、攝政殿は吉野の奥へ^①とぞ申あひける^②

——長門本①「人」アリ(延・盛) ②ナシ(延) ③ナシ

(盛) ④ナシ(盛) ⑤「たり」アリ(延)

長門本等の「吉野の奥へ」に対応しているところが重要である。

勿論、これは事実ではなからう。しかし、「吉野の奥」が「憂世ノ外」とみなされうるとすれば、一つの話もうまわれるのである。

南都本の「攝政殿落留給事」を『吉記』の「風聞云(中略)殿下令宿侍直廬、公卿已下諸司不可候、可何様乎之由、有御返答、不及是非、可為御車之由、重被申之、殿下忽昇給(中略)殿下同令扈從給、即遷御六波羅泉亭(中略)殿下同令扈從給、而自途中西轅逐電、物念之間、武士等不知此旨、内藏頭信基朝臣在御共、雖奉留無御承引云々、誠是氏明神冥助歟、先令落着信範入道知足院給、次令向西林寺給」と比べて、その異同に驚くのである。「殿下同令扈從給、而自途中西轅逐電」「誠是氏明神冥助歟」以外一致するものをみない。

島津忠夫先生は「祇王説話と平家物語」^(註一)で「筑後守貞能をはじめ、人物名の明示、六条、堀川長講堂、法輪寺などの場所を適確に示している」等の特徴をあげられ、その解釈として「私は南都本の『祇王祇女事』が『平家物語』に挿入される以前の祇王説話の形をとどめているものと見ている。それは、祇王説話の原型というのではなく、一つの説話の達成を示していると思うのである」という考えを示された。「攝政殿落留給事」では、島津先生が南都本の「祇王祇女事」の性格としてあげられたものの第一項がなく、事情を異にしているかのごとくであるが、「一つの説話の達成を示している」というお考えにひかれる。南都本の「攝政殿落留給事」はこれまでみてきたように、『平家物語』にとりいれられた最初のかたちとはどうしてもみなせないものである。源平盛衰記のそれとの関係も明

- (28) 伊賀平内左衛門、新中納言に、将来を悲観して都落をくやむ
(29) 新中納言もこれに同感であり、共に涙を流す
(30) 東寺の南大門に車を止め、天皇に何者か尋ねる

(7) 「いかにせん」の歌

(31) 春日明神の使なることを告げて、天皇は消える

(22) (32) 摂政は進藤が止めたのは春日明神の加護であつたかと悟り、

三笠山を拝する

(33) 摂政は都より吉野の奥へ移る

配列は前記のように「落人名寄」の後に「頼盛落留」と並んで置かれている。頼盛が落留まつた事は「惟盛惜妻子遺」の後、平家の本隊が「鳥羽殿ヲ過サセ給」て「中有ノ旅」にあるような心況を歌に詠じている、そこで暗示される。因にこの部分は「越中ノ次郎兵衛盛継大臣殿ノ御前ニ進ミ参テ申ケルハ池ノ大納言殿ハ一定御留リト覚候コソ口惜候へ」云々の表現で長門本等に類似することが比較の結果わかる。更に「落人名寄」の前に「池ノ大納言ノ一類ハ今ヤくト待給ヒケレ共一所モ見ヘ給ハス」の文もある。以上、「頼盛落留」の下ぞめと考えられるが、それが長門本等に一致する表現であることから、配列の改編と関係していると思われる。南都本の「頼盛落留」は長門本と逆に、こちらが骨だけである。このことは、或いは南都本が長門本のものから改編し、「落人名寄」の後に落留まつた者をまとめようとした結果かも知れないと考える。

その内容については「高則カ止メ申ケルモ偏ヘニ大明神ノ守ラセ

「攝政殿落留給事」をめぐって

給ケルニコソ」という表現があるように、摂政の落留まりを進藤の働きとして受けとめ、それがとりもなおさず春日明神の加護であつたとするものである。

南都本では摂政が都落しようとした訳を前記のように「智」という準一族のつながりに帰している。この理由は勿論長門本等にも記されているが、長門本等には更にその上に摂政が法皇の御幸を当込んでいた旨記されていた。実は、そうであつてこそ摂政らしい政治的判断であつたわけで、南都本は故意にこれを省略したものかと考えられるが、摂政の行為は姻族のよしみにとらわれる人間の凡情の次元におろされたわけである。

摂政の方に落留まる要素がさしあたりないとすれば、進藤左衛門がこの逸話の主人公ということになろう。彼はまず摂政の「御身ヲハナタレヌ侍」であつたとされる。彼の己れの役割への自負は摂政に「是程ノ御大事ヲハイカニ高則ニハ仰ラレ候ハサリケルソヤ」と詰問するまでである。摂政はまさしく進藤に吞まれているわけである。

後になると、この進藤は即ち春日明神の化身でもあつたことになるのだが、摂政と進藤の権威の逆転が春日明神の化身であつたことによるのか否か興味がある。「サ程ノ御事ヲ高則ニ觸仰ラレサルヘシトハ覚ヘヌ物ヲ」等の表現は普断も逆転していたかの如くである。とすれば、その前半部の造形には、基通の権威が地に落ちていた以上に、高級貴族を支えていた「侍」の自負が投影していると思うの

(中略) きとめを引あはせたれば牛かひもすゝまぬ道なれば牛のはなをひき返し一桝あてたりければ牛もくきやうのうしなれは造みちをうへに東寺までそれより大宮をのほりにと飛にとひてそ還御なる

七条朱雀からいつの間に造みちを上る所まで行っていたというのか。「御車の前にすゝみ出て」は都落ちしながらとは解しがたい。

「いかかすへきと覚しめしわつらはせ給」たとあるので、行列の進みも止まったとみるべきであろう。とするならば「七条朱雀まで」は

七条朱雀——朱雀を上に 延慶本・長門本

を受けついであると考えられ、「造みちをうへに東寺までそれより大宮をのほりに」は

鳥羽ノ秋ノ山——作道ヲ上リニ——東寺ノ南大門ニ 南都本

と関係があるのではないかと思う。

進藤左衛門の行為を春日明神の示現とみなすモチーフは南都本にもみられるので、源平盛衰記のものは、長門本の内容を南都本的なものを参考にして改作したのもあろうかと考えたりする。南都本的なものという曖昧な表現をしたのは、後述するように、南都本の「攝政殿落留給事」の内容には編集の跡かと考えられる部分が含まれていて、源平盛衰記のそれより古いと断言しがたいからである。南都本と源平盛衰記の関係は別に考えたい。

(註二)「平家物語評講」下 八八四頁

三

次に南都本における「攝政殿落留給事」の構成を簡条書きにして示し、考察して行こう。

(1) 摂政の人物紹介

(2)(4) 摂政は清盛の賀であったので、別れがたくて、共に都を落ちる

(23) 進藤の人物紹介

(24) 進藤、嵯峨で都落を聞き、連絡のなかったことを怪しみながら邸に急行する

(25) 都落を確認した進藤は、そのまま追いかけて、鳥羽で行列に追いつく

(26) 進藤、車の轅に取付て、事前の相談なく遺憾であること、平家の都落は神罰だから、同行しても望みのないことを説き、ひき返すよう説得する

(21)(27) 進藤の言葉も終わらないうちに天童が車の轅に取付て、向きをかえる

(13) 牛、勢よく車を引いて作道を上る

(14) 越中次郎兵衛・伊賀平内左衛門尉、大臣殿に摂政の事を報じ、池大納言の例もあげて将来を悲観する。そして、摂政の侍に矢を射かけ、都で死にたい旨を申して発向しようとする

(16) 大臣殿、これを制する

(17) 越中次郎兵衛、伊賀平内左衛門あきらめる

に話を生んでゆく、そうした活動の存在を物語るのである。

(ハ) 源平盛衰記

配列は前記のように「主上都落」より平家ゆかりの館々が放火され、瞬時にして灰燼に帰したことが詠じられて「攝政殿落留給事」に移る。それは、都落の全体描写が「聖主臨幸」で終わり、これより個々の逸話という形でその一部一部を大写しにするという意図である。逸話の冒頭におかれたのは摂政という身分と転進の時間によるのであろうか。

内容は前記したが、特に長門本に該当する所のない次の部分を注目したい。

其あひたに近衛殿は遙にのひさせ給けるか御めに御覧しける。
艸童二人車の左右の轅にとりつきてやるともなくかくともなく御供に候けり牛の前に赤衣の官人春の日と書たる札を櫛の枝にとりくしてはしるとそ御覧しける誠に春日大明神高範に入かはらせ給つゝかくはかり申けるこそとかん涙をなかせ給つゝ

先に長門本で進藤左衛門に機転ということを記したが、ここでは「誠に春日大明神高範に入かはらせ給つゝかくはかり申けるにこそ」と進藤左衛門の行為が春日明神のはからいに転じている。長門本と比べるときに、進藤左衛門像の神格化はその言葉に顕著である。彼はまず「くふし給へき平家の一門池殿の公達小松殿の公たちみなとゝまり給へり」云々と述べる。以後の逸話の下ぞめになるわけだが、状況の把握が正確である。

「攝政殿落留給事」をめぐる

因みに、摂政が「落留」る時点ではこのとおりであった。「愚管抄」に「又コノ中ニ三位中將資盛ハソノコロ院ノオボエシテサカリニ候ケレバ、御氣色ウカガハント思ケリ。コノ二人鳥羽ヨリ打カヘリ法住寺殿ニ入り居ケレバ、又京中地ヨカヘシテアリテルガ、山ヘ二人ナガラ事由ヲ申タリケレバ、頼盛ニハ、サ聞食ツ。日比ヨリサ思食キ。忍テ八條院邊ニ候ヘト御返事承リニケリ。モトヨリ八條院ノヨチノ宰相ト云寛雅法却が妻ハシウトメナレバ、女院ノ御ウシロミニテ候ケレバ、サテトマリニケリ。資盛ハ申イルル者モナクテ、御返事ヲダニ聞カザリケレバ、又落テアイグシテケリ」とある。

次に「たとひ主上行幸有とても御代は法皇の御代、御運つき給て外家の悪徒にひかれ花洛を落させ給はん行幸に供奉せさせ給たらハ末たのもしかるへき御事か」とつぶやくのであるが、摂政の株を奪った見識と言うべきであろう。

以上のように源平盛衰記の「攝政殿落留給事」は進藤左衛門の行為を春日明神の示現とみなすのがモチーフである。

ところで、これに、一つ矛盾するところがあるが、それは長門本のもの改作によって源平盛衰記がなったことを示すのではないかと考える。

即ち、次の部分である。

御出有て御車を七条朱雀までやらせ給たれとも法皇の御幸はなかりけりいかかすへきと覺しめしわつらはせ給けるに御ともにさふらひける進藤左衛門尉高範といふ侍御車の前にすゝみ出て

して確認したという事情も記されていない。

こうして「頼盛落留」の冒頭部は「池大納言頼盛は、池殿に火かけて子息保盛、為盛、仲盛、光盛等引具して打出らる」という、都落ちした平家一門の行為を代表するかたちになったのである。従って、虚構されることによって、摂政の場合と大差ない筋ができあがったのである。

「落留」という事実の一致、更に、この筋の類似のために「攝政殿落留給事」は甚だ精彩を欠いたものとなっている。摂政が脱落した次第の骨だけが記されているにすぎない。が、各人物の言動は簡潔におさえられている。摂政の日和見、進藤左衛門の機転、越中次郎兵衛の武断、宗盛の消極。この事件を通して、その性格を鮮明にした各人の言動、それが長門本の記事の中心である。

(ロ) 延慶本

長門本と書承関係があると思われるが、あたかも長門本の「攝政殿落留給事」に「いかにせむ」の託宣が増補されたかのような内容である。この託宣の部分のために話の展開は屈折してしまったと考える。即ち、一旦出立した摂政ではあったが、「法皇の御幸」がなかったもので、その心は動揺していた。そこに白髪のお翁が現われ、「いかにせむ」の歌が聞こえる。摂政は「是を御覧して、我いつる事をは神明の御とかめのあるにや、春の日とは春日の明神とゝめさせ給へとにや」と思いめぐらす。動揺していたところに、更にこのような不思議が生じたのであるから、摂政の主導で「落留」が行な

われるのが自然の展開であると考え。ところが、折良く、進藤左衛門も「此より御還あるへくや候らむ」と進言するにもかかわらず、摂政は「平家の思わむ所いかゝあるへからむと御氣色有」ただけであった。摂政はこの逸話の主人公になったかにみえて、進藤左衛門の背景に急に沈んでゆくのである。

このことは延慶本の「攝政殿落留給事」が別々のモチーフからなる逸話の一つに組みこんだからであると考え。即ち、託宣の部分は摂政の「落留」を春日明神の託宣に帰する本来別の話であったに違いない。その他については長門本の項で述べた。

延慶本が「落留」の理由を詳述する傾向があることは「頼盛落留」を見れば明白である。即ち、長門本と相似た内容を記した後に「抑々頼盛のとゝまり給ふ志を尋れば」と明記して(イ)抜丸のことで「内々叔父甥の中心よからす」と噂されていたこと (ロ)八幡大菩薩の御示現のあったこと を記している。

つまり、延慶本の編著者は「落留」の理由を網羅する意図があったのである。佐々木八郎氏は「事のなりゆきが有利に運ぶとなると何事につけてもそれを神明仏陀の冥助であると考える中世的信仰^(註一)」という言葉を使われたが、延慶本の編著者の落ち着くところは神明仏陀であった。「頼盛落留」では二点を後補したが、「攝政殿落留給事」では一つだったので途中に編み込んだものではあるまいか。

因に、託宣の部分の展開には類型とみなせる程の一致が指摘される。このことは、勿論、平家物語の記事等がヒントとなって、次々

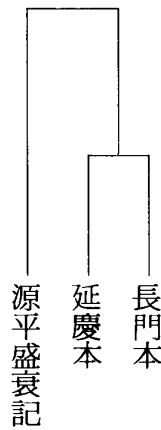
二人の艸童と春の日と書いた札を持って先行する赤衣の
官人を見る

(22) 摂政は春日明神が進藤にのり移ったのだと思って感
涙を流す、以上の二項がある)

(18) 摂政は西林寺へ入り、更に知足院へ移る

(19) 人々は摂政は吉野の奥だと言っていた

春日明神の御告に関して異同はあるが、それ以外の構成は三本共
一致していることが指摘される。又、表現についても相似たものを
見出す。このことは、内容上、この三本が近い間柄にあることを示
していると思われる。



その内容上の遠近を图示すれば、右のようになる。次に、各本
ごとにその配列、内容をみていこう。

(1) 長門本

配列は前記のように延慶本と同じく「落人名寄」の次である。又、
「頼盛落留」も「落人名寄」の前に置かれ「池大納言の類は、今
や」と待給けれども終に見え給はず」でそれに続いているので、
「落人名寄」を目安にして、行動を共にするはずの人で都にとどま
った人をまとめて描こうとしていると考える。そして、次の「貞能
参小松殿墓」で貞能、盛次、景清が帰洛し「都に残り留る平家ども

「攝政殿落留給事」をめぐって

討べし」との噂が流れると「池ノ大納言は色を失ひて騒がれる」
ことが記されるので、これらが一連の構想の下に配列されているこ
とがわかる。

「攝政殿落留給事」の内容については「頼盛落留」との類似が指
摘される。即ち(1)都落ちに立ったことが記されて、すぐその後別
行動に走ることが続くという記述の仕方 (2) 越中次郎兵衛盛次が
「口惜く候ものかな」と憤り、武力を行使しようとして、宗盛に制止
されるという記述の仕方がそれである。

(1)について説明を補えば、「頼盛落留」には虚構がある。『愚管
抄』によれば、都落ち直前頼盛は山科方面に出陣している。「カ、
リケル程ニ七月廿四(日)ノ夜、事火急ニナリテ、六ハラへ行幸ナ
シテ、一家ノ者ドモアツマリテ、山シナガタメニ大納言頼盛ヲヤリ
ケレバ再三辭シケリ。頼盛ハ「治承三年冬ノ比アシザマル事ドモ
聞エシカバ、ナガク弓箭ノミチハステ候ヌル由故入道殿ニ申テキ。
遷都ノコロ奏聞シ候キ。今ハ如此事ニハ不可供奉」ト云ケレド、内
大臣宗盛不用也。セメフセラレケレバ、ナマジイニ山シナヘムカイ
テケリ」「ソノ中ニ頼盛ガ山シナニアルニモツゲザリケリ。カクト
聞テ先子ノ兵衛佐為盛ヲ使ニシテ鳥羽ニヨヒツキテ『イカニ』ト云
ケレバ、返事ヲダニモエセズ、心モウセテミエケレバ、ハセカヘリ
テソノ由云ケレバ、ヤガテ追様ニ落ケレバ、心ノ内ハトマラント思
ヒケリ」長門本では右の前半部が全く欠落しているのである。それ
だけでなく、後半部の頼盛に都落ちの知らせがなく、為盛を使に出

(二) 南都本

- (1) 主上都落
 - (2) 放火
 - (11) 經正仁和寺宮参事
 - (12) 青山の沙汰
 - (5) 惟盛惜妻子遺
 - (13) 「故郷を」「はかなしや」の歌
 - (14) 畠山兄弟暇給事
 - (7) 落人名寄
 - (6) 頼盛落留
 - (8) 攝政殿落留給事
 - (9) 貞能参小松殿墓
- 猶お、四部合戦状本にはこの記事はない。又、当道系本については必要な所で触れることにして、ここでは省略する。

(註一) 渥美かをる「平家物語の基礎的研究」二六四・二六五頁を参照した

二

次に、長門本、延慶本、源平盛衰記における「攝政殿落留給事」の構成を簡条書きにして示し、それぞれについて考察していくことにする。(構成については、延慶本を中心にして、長門本、源平盛衰記の異同を下に註記する)

- (1) 摂政の紹介
- (2) 摂政より都落ちに供奉する内諾があったこと

- (3) 内大臣より行幸の知らせがある
- (4) 摂政の御出なる
- (5) 法皇の御幸なく、摂政進退に悩む
- (6) 老翁車の前に現れる(長・盛―ない)
- (7) 「いかにせむ」の歌(長・盛―ない)
- (8) 摂政これを都を出るなという春日明神の御告ではないかと思
い、進退に悩む(長・盛―ない)
- (9) 進藤左衛門、摂政に御幸もなく、一門も多く落ち留まること
をあげ、還御をすすめる
- (10) 摂政は平家に気がねする
- (11) 進藤左衛門、摂政の態度を無視する(盛―進藤左衛門が今は
法皇の御代だから、外家に引かれての行幸に供奉してもた
のしいはずがないとつぶやいたことが記されている)
- (12) 進藤、牛飼に目を見合わせる(盛―20牛飼も今回の供奉は氣
が進まなかったことが記されている)
- (13) 牛飼、車をやり返し、朱雀を上る(盛―造みちを上り、東寺
から大宮を上ったとなっている)
- (14) 越中次郎兵衛、これを見て、摂政をとどめようと追かかる
- (15) 進藤、防ぎ戦う
- (16) 大臣殿、一門にも留る人あり、忘恩の者などかまうと言っ
て越中次郎兵衛を制する
- (17) 越中次郎兵衛、ひき返す(盛―21摂政、轅に取りついている)

「攝政殿落留給事」をめぐって

——「侍」の物語など——

橋口晋作

「攝政殿落留給事」^(註一)の本文や配列に平家物語諸伝本において異同があることは既に指摘されていることである。

そこで、非当道系本を主にしてこれの孕む問題を整理することを試みたい。

(註一) 章段名は南都本によった。

(註二) 呼称は小西甚一「平家物語の原態と過渡形態」(教育大学文学部紀要国文学漢文学論叢第一四輯)によった。

一

最初に「攝政殿落留給事」の配列を簡条書きにして示しておきたい。^(註一)

(イ) 長門本

- (1) 主上都落
- (2) 放火
- (3) 聖主臨幸
- (4) 六波羅邸焼亡

「攝政殿落留給事」をめぐって

- (5) 惟盛惜妻子遺
- (6) 頼盛落留
- (7) 落人名寄
- (8) 攝政殿落留給事
- (9) 貞能参小松殿墓
- (ロ) 延慶本
- (1) 主上都落
- (2) 放火
- (3) 聖主臨幸
- (4) 六波羅邸焼亡
- (5) 惟盛惜妻子遺
- (6) 頼盛落留
- (10) 拔丸の事
- (7) 落人名寄
- (8) 攝政殿落留給事
- (9) 貞能参小松殿墓
- (ハ) 源平盛衰記
- (1) 主上都落
- (2) 放火
- (3) 聖主臨幸
- (8) 攝政殿落留給事
- (5) 惟盛惜妻子遺